

”生態学琵琶湖賞”受賞に寄せて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 水産研究・教育機構 公開日: 2024-07-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森田, 健太郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2009762

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



「生態学琵琶湖賞」受賞に寄せて

さけます資源研究部 資源保全グループ主任研究員 森田 健太郎



第19回 生態学琵琶湖賞を受賞しました

世界有数の古代湖である琵琶湖の名称を冠する生態学琵琶湖賞は、1991年に滋賀県により創設され、現在は日本生態学会が滋賀県と共同で運営しています。その第19回目の受賞者に、香港大学のKenneth M. Y. Leung教授と私が選ばれました(写真1)。生態学琵琶湖賞は、水環境に関連する生態学およびその周辺分野における50歳未満の優れた研究者に贈られる賞で、国際的にも知名度が高く、これまで錚々たる方々が受賞されています。これまで指導いただいた先生や上司の方々、そして、先輩、同輩、後輩の皆さんから多くの事を教わり、さまざまな経験をさせて頂きました。今回、このような名誉ある賞を受賞できたのも、その方々のおかげだと思います。

授賞式および受賞講演は2017年8月27日に滋賀県立琵琶湖博物館で行われました。受賞講演では、Kenneth M. Y. Leung教授から「水圏生態系保護のための環境の質的基準を科学的に導く：その問題点と解決」という演題で講演がありました。私の方からは、「魚を食べながら守るために—自然の摂理を基盤として—」という演題で講演させて頂きました(写真2)。その内容について、簡単に紹介させて頂きます。

日本では、昔から漁業が営まれ、魚介類は重要なタンパク源として利用されてきましたが、20世紀後半からは全国的な漁獲量の低迷から、「獲る漁業」から「育てる漁業」への転換がうたわれ、種苗放流を含めた資源管理も行われています。しかし、その放流の効果が科学的に証明された例はあまり多くなく、逆に放流を通じて対象魚の適応度が低下するといった負の側面が知られるようになってきました。これからは、放流だけに頼るのではなく、魚が本来持つ自然の再生産力を最大限に活用することが大切です。人工繁殖だけで世代交代を維持させるのではなく、人工繁殖で生まれた放流魚も親となった時に自らの力で自然界で子孫を残すことができるように環境を整え、自然産卵で生まれた野生魚も種親として種苗放流をおこなう—という放流魚と野生魚を融和させた資源管理が国際的に求められる時代となっています。

サケ漁獲量の年変動は、海水温などの海洋環境の年変動に起因する生存率の年変動であると考えられますが、近年は漁獲量が徐々に減少する傾向が続いており、海洋環境の年変動では説明しきれない部分があります。サケ資源を回復させるためには、資源減少の根本的な原因を突き止め、それを解決する対策を取る必要があると感じています。人工繁殖を主体とした増殖事業で10世代以上

がたち、徐々にその影響が顕在化している可能性についても調査・検討するときに来ているかも知れません。自然産卵を保全・活用した環境保全型増殖事業は、漁業の側面からも、生物多様性保全の側面からも注目に値します。サケ資源を今後も有効活用できるよう、様々な側面から検討する必要がありますと思います。

ちなみに、琵琶湖博物館において催された懇親会では、琵琶湖の固有種であるビワマスが振る舞われました。さらに、友人からはその日の朝に釣られたビワマスもお土産に頂きました(写真3)。ビワマスはお世辞ではなく大変美味なサケ科魚類であり、ふ化放流事業も行われていますが、近年の研究で自然産卵由来の野生魚が漁業資源として大きく貢献していることが知られています。

最後に今回の琵琶湖賞受賞を励みとして、受賞者の名に恥じぬよう、今後も水産学に資する研究に精進したいと思います。



写真1
生態学琵琶湖賞
授賞式



写真2
受賞講演の様子



写真3 ビワマス(尾田昌紀氏提供)